忘れ得ぬ赤川教授の思い出

M㉕　伊藤 裕

「伊藤君、ちょっと話があります・・」と言って赤川浩爾教授の部屋に呼ばれたのは 1978 年の秋、工学部食堂横のキンモクセイが高く薫っていた日であった。話の内容は「博士課程に進学しないか」とのことであった。当時の赤川教授は神戸大学の理工系博士課程の設立に奔走されていて、1979 年春からの開設に目途がたち、自分の研究室からも学生のだれかを博士課程に進学させたいと思っておられたのであろう。この中で赤川教授は伊藤なら馬力と突進力だけなら何とかなると思われて、進学の話を持ち掛けられたと思われる。

当時の伊藤は大学院修士課程を修了すれば、当然、就職するつもりでいた。したがってこの赤川教授のお話は「晴天の霹靂」、「驚天動地」・・他の熟語を思いつかないほど、まさに想定外の出来事であった。それ故に自分に博士論文がまとめられるか、博士課程終了後に就職口があるであろうか、など色々なことを考えて一時、逡巡した。しかし「人生で博士号を取得できるチャンスはあまりないはずだ」と意を決して神戸大学自然科学研究科博士課程第 1 期生として進学する方向に舵を切った。

博士課程では、（気体と液体とが一緒に流れる）気液二相流での水撃現象の研究を手がけた。単相流では流れは一種類しかないが、二相流になると流動様式が気泡流、スラグ流、環状流など多岐にわたり、いきなり現象が複雑怪奇になる。

赤川教授は常に「現象を支配している原理は何か」と本質をいつも問いただし、研究方針を明確にご指導いただき、それ以外の詳細なアプローチは伊藤に好きなように任せて頂いた。「君の理論は木に竹をついだようだ、もっとバランスのある理論解析を・・」など、赤川教授から時には辛辣なコメントもあったが、伊藤は「次は赤川教授をうならせてやりたい」と、新しい理論の検討とその実験に挑戦していた。3 年間の間、自分で言うのも恥ずかしいが、120%の情熱と時間を注ぎ、この研究に打ち込んだ。

赤川教授はいつも、「詳細にこだわらず、全体像をつかむべし」、「単相流（理想状態）に対して気液二相流（現実の問題）の差異は何か」と問いかけられておられ、この考えは伊藤にとって単なる研究ではなく、実際に社会に出てからの仕事にも随分と役立つものであった。

当時の忘れ得ぬ日々を振り返れば、赤川教授は研究者として気液二相流の第一人者でおられましたが、若い人を育てるという点でも稀代な伯楽でもあったと思い出されます。
心からご冥福をお祈りいたします。

（ 終 ）

追悼文受付日：平成 29 年（2017 年）8 月 7 日　赤川先生-33